



技術で創る自然とのベストバランス

(株)エクソワタナベは1919年(大正8年)に創業し、104年を迎えました。設備会社のイメージが強いと思いますが社内には5つの部門があり、様々な分野でお客様と地域社会に満足を提供しています。また、30年近く自然環境の保全活動をしておりましたが、2022年に改めてSDGsを宣言しました。

建築設備部門では、給排水衛生設備及び空気調和設備を行っています。快適な環境を保つためには清浄な水と空気存在が必要不可欠です。豊富な実績とノウハウで企画から設計、メンテナンスに至るまで対応しています。

上下水道・土木部門では、上下水道の本管工事を行っています。藤枝市内には50年以上埋設されている配管があります。住民の皆様が安全に継続的に利用できるよう布設

替え工事を主に行っています。

エクステリア部門では、建物の外回りのデザイン設計から施工及び造成工事を行っています。塀や門、アプローチなど素敵な空間を建物の外廻りに創り出します。

ビオトープ部門では、ビオトープ創作、植栽造園工事を行っています。ビオトープとは自然復元を意味しており、ホテルやメダカなど希少生物の保護保全をしています。

建設資材部門では、生コンクリートやセメント、コンクリート二次製品等の販売を行っています。限られた資源を無駄なく使うため



に、お客様のコストやニーズ、納期に合わせ、環境に配慮した資材の調達をしています。

5つの部門が合わさることで、「技術で創る自然とのベストバランス」が成り立ちます。これからも自然豊かな故郷のために、よりよい未来を残せるよう精進してまいります。

50th
Anniversary

建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般
財団法人

愛知県建築住宅センター



ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

法人協力会通信 65

株式会社エクスワタナベ 表紙裏
渡邊 真行

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】建築とデジタル技術の承前啓後
第4回 - 承前啓後への試み(前編) - 2
水谷 晃啓

連載:コンペ・プロポーザルのありかた ⑥
西尾コンペ結果発表 4
脇坂 圭一

連載:BIM が切り開く新たな創造性
第6回(最終回)
～ 零三工作室 東福大輔、山上建築設計 山上健 座談会 ～ 8
横関 浩

特集: JIA東海支部の活動紹介 10
JIA東海支部設計競技 / 間瀬 高歩 12
JIA東海住宅建築賞 / 吉元 学 12
JIA東海学生卒業設計コンクール / 奥井 康史 13
建築ウォッチング / 江川 静男 13
JIA塾 / 高島 ゆかり 13
大学授業 / 鈴木 賢一 14
建築教室 / 黒野 有一郎 14
JIAの窓 / 山田 浩史 15
アーキテクトみえ / 服部 昌也 15

保存情報 第262回
登録有形文化財: 川田家住宅主屋 16
澤村 喜久夫

編集後記 16
生田 京子・恒川 和久

コルゲートハウス「川合健二邸」報告 その5 17
黒野 有一郎・富田 正行

地域会だより 今後の予定

■ JIA東海支部

・11/9～11 JIA建築家大会2023東海in常滑
・11/17 支部役員選挙推薦立候補届出締切り
・11/17 第5回支部役員会

■ JIA静岡地域会

・11/16 静岡地域会役員会の開催 (WEB同時開催)
・11/30 アメリカ広葉樹建築家懇談会in静岡

■ JIA愛知地域会

・11/3・10・17・24 名古屋市立大学「建築家の仕事」
・11/29 一寸格子ワークショップ 猪高小学校建築教室(第1回目)

■ JIA岐阜地域会

・11/21 第7回役員会 18:30～20:30

■ JIA三重地域会

・11/15 三重短期大学住居環境コース1年生 出前授業(講評会)
・12/9 三重建築学生合同課題発表会2023 三重大学にて

Bulletin Board

出版案内



保存情報 第4巻の出版です

本誌連載中の「保存情報」を収録しました。2015年1月号以降に掲載された登録有形文化財に加え、身近にある魅力的な建物など計110件、会員の地道な現地調査をもとに紹介しています。

『保存情報IV 東海四県 ふるさとの歴史環境を訪ねて』
発行: (公社)日本建築家協会東海支部 愛知地域会保存研究会
A5版/240頁/定価1,500円+税

表紙 常滑の景色……⑧「常滑大会 始動!」

いよいよ始まります。11月9日より建築家大会が常滑で開催されます。テーマ「環る」をここまで、幾度となく説明し、繰り返し考えてきた。それは各イベントにつながりを持たすことができました。仲間と多く時間をかけて積み上げた大会が動き出します。プラスに転じる大会にしましょう。

※デザイン:フォノンデザイン 谷野大輔 (トリミング加工)



浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画

承前啓後への試み (前編)

□私的承前啓後の曙

前回までに1960年代ごろから始まった我が国のデジタル技術応用の特徴について、東京大学丹下健三研究室を中心に据えながら略筆した。また、簡単にコンピュータプログラムが書ける時代となり、建築分野におけるデジタル技術の承前啓後を誰しもが実践できるようになったことを述べた。今回を皮切りに残り3回は、承前啓後の一助となることを期待し、筆者のこれまで実践事例を紹介していく。承前啓後の方法に正解や不正解、唯一無二の答えがあるものではない。各々に適したアプローチがあり、デジタル技術応用が目的にあった手段として導入されているか、過去の試みと比較しながら見定めることが重要である。注意すべきはデジタル技術の恩恵から得られる結果の目新しさに囚われ、手段であるはずのデジタル技術を利用すること自体が目的化してしまいがちな点である。建築設計の評価同様に、デジタル技術の応用においても現在地の相対化には歴史を必要とする。手段として適したアプローチであったか、自身の実践に対する第三者的な評価の声が届くことを期待し、我が身を省みつつ紹介していきたい。

□対話型都市設計支援ツールの開発概念と目的

本連載の第2回目、C.アレグザンダーらの高速道路建設におけるスタディを紹介した。この都市設計における最適化の優れた点は、決定要因の図式の重ね合わせ、レイヤの複層状態によってその組合せを操作できる点であり、決定要因の優先順位を視覚化された図式パターンから検討できる点にある。ここで紹

介する「対話型都市設計支援ツール」は、都市の空間構造の把握と改変のためのアイデアを創発するための思考実験を実践するために開発を行った。都市設計において行われる都市解析シミュレーションは、通常、災害時の避難を想定した人流シミュレーションなど、計画要件を満たしているか評価・確認を行う目的でなされることが多い。そのため、設計が完了した状態に対して行われることが一般的で、都市の構成要素や形態のデザインと、シミュレーションによるデザインの評価の段階は分けられる。

それに対し「対話型都市設計支援ツール」は、デザインとシミュレーションを同時並行で行えるようにした。メディアアートでよく用いられるインタラクティブデザイン技術を応用して、入力されたシミュレート要素に対して即座に回答するデザインシステムとすることで、空間的アイデアの創発につなげることを目的としている。このシステムの操作を行う設計者は、シミュレータによって視覚化される結果を観察しながら、ジェネレータを用いて対話的にシミュレート要素の入力・編集・削除を行う。設計者はこれまで分断されていたデザインの生成と評価という二つの操作を、対話的な方法で繰り返し行いながら、設計と評価が分断されない動的で連続的な手続きから都市設計におけるスタディを行うことができる。この逐次変化するシミュレート結果を観察しながら行うコンピュータとの対話は、川に石を置きながらその流れの変化を見極めつつ、意図する状況へと調整するプロセスに例えられることがある。さながら石を置くという行為から川の流れが変化する仕組みを体感していくように、コンピュータとの対

話からデザイン対象の仕組みを経験的に理解していくことが出来る。

□対話性の構築とシステム概要

ここでは、その対話性をRhincerosとGrasshopperという二つの既成ソフトウェアを用いてジェネレータの開発を行い、Javaベースの統合開発環境であるProcessingを利用してシミュレータの開発を行って構築した。3DモデリングソフトのRhincerosと、そのプラグインソフトのGrasshopper双方とも、Pythonでのスクリプト操作、開発にも対応しており、様々な形で開発された拡張機能がオープンソースとして日々配布されている。

シミュレータ開発のために用いたProcessingは、MITメディアラボにおいて開発がはじまった、グラフィック機能に特化したJavaベースの開発環境である。視覚的なフィードバックが即座に得られるというインタラクティブデザインに向けた特性を持ち、電子アートやビジュアルデザインの分野で用いられる。具体的には、Grasshopperを用いて要素の形態や数などを変数化し、条件値が可変なパラメトリックなジオメトリモデルを作成し、Processingを用いてエージェントベースのコンピュータ・シミュレーションを構築した。

ファイルの入出力によるデータ交換をリアルタイムに行うことを可能にすることで、デザインとシミュレーションを連動さ



(図1)リアルタイムフィードバック

せるため回路を構築し、図1に示すようにジェネレータ、シミュレータの二つのリアルタイムフィードバックによって、これまで断続的であったデザインと評価の関係を同期させ対話性を獲得した。

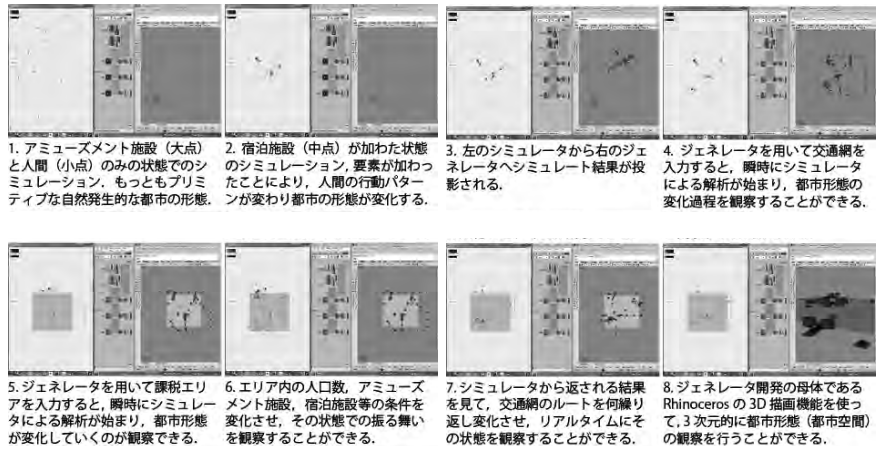
相互連動のサイクルを構築することで、設計者の意思決定による最適化を断続的に繰り返すことを可能にすることができる。設計者とコンピュータのコミュニケーションの上に成り立つ独創的な対話システムを開発することで、既述した開発概念と目的の達成が可能なデジタル技術応用を行った。

□「対話型都市設計支援ツール」を用いたデザインプロセス

ここでは、対話型都市設計支援ツールを用いたケーススタディとして開発を行った、アミューズメント施設(以下、施設A)と宿泊施設(以下、施設B)の立地を扱うモデル、Quantitative Urbanism Environment(以下、QUE)を具体例として紹介する。紙面の都合によりシミュレーション条件とシステムフローに関して詳細に紹介できないため、そちらに関しては拙論「「デザイン思考」に基づいた対話型都市設計支援ツールの開発」(日本建築学会技術報告集23巻53号, p.309-312)を参照願いたい。

QUEでは施設Aと施設Bの立地、交通といったシミュレート対象となる要素をモデル化し、ハフモデルを用いてヒトの行動をモデル化した。シミュレーションシナリオの概要は次のとおりである。

- 1)施設Aが自然発生的に立地しはじめ、娯楽を目的に集めた各ヒトエージェントが、任意の施設Aを求めて移動をはじめ
- 2)損益分岐点より赤字経営となった施設Aは



(図2)対話型都市設計支援ツール

撤退し、利益を上げている施設Aiiあるいは利益が得られそうなエリアに移転する

3)設計者によって施設Bが入力されると、一定時間毎にヒトエージェントは任意の施設Bを選択して休息をとるようになる

4)設計者によって交通網が入力されると、交通網を利用した方が目的とする施設Aへの移動の利便性が高い場合、ヒトエージェントは移動手段として交通網を選択するようになる

5)設計者によって課税エリアが入力されると、エリア内の施設Aの損益分岐点が変わる(課税エリア内は利益率が下がる)

□承前啓後から得たもの

スタディで示したデザイン過程はすべて仮想であり、現実社会の極々一部を模倣したに過ぎない。ここでのスタディに限らずコンピュータ・シミュレーションによってシミュレートされる全てのモデルは、単純化された現実の模倣であり本質的には虚偽のものであるが、モデルで表されるある特定の实体・事象・過程に対する洞察力がシミュレーションによる可視化を通して高まることが実証されてきた。科学者にとってのモデル化は思考力を拡張するための方法であり、モデルの再現性や効果的なシミュレータ構築に関する研究は、どの分野においても重要なものとされて

いる。科学者にとってのモデル化と同様に、デザイナーの空間に関する思考力を拡張するための方法の一つにノーテーションがあり、こうした図式化の作業は設計者にとって都市空間を把握するための思考実験に当たる。ノーテーションは単なる抽象図式ではなく都市空間へアプローチするための媒体であり、図2で示す対話型都市設計支援ツールの出力画面はそれに当たる。図2の一連の図式化と流れからもわかるように、第2回目で紹介した東京大学丹下研究室が空間の視覚構造を把握するために行ったデジタル技術応用の試みで作成した被眺望範囲図を意識して行ったものである(第2回目の連載に掲載した図を参照願いたい)。

丹下研同様に空間認識のレベルまで、つまり単に解析や処理の問題としてではなくデザインの問題として扱うことを目指した。加えて、丹下研がアーバン・デザインの専用言語である「URTRAN」の開発においてなしえなかったシミュレーションとデザインの連動、フィードバック回路の構築を行うことが、承前啓後の点において重要であった。

水谷 晃啓 MIZUTANI Akihiro

建築家。M2A主宰。豊橋技術科学大学 准教授。博士(工学)。1983年生まれ。2013年芝浦工業大学大学院博士(後期)課程修了。2009年隈研吾建築都市設計事務所。2010~14年SAITO ASSOCIATES。2013年芝浦工業大学博士研究員。2014年~豊橋技術科学大学、東京電機大学、芝浦工業大学非常勤講師。

豊橋技術科学大学大学院 准教授
M2A主宰
博士(工学)・一級建築士

水谷 晃啓



西尾コンペ結果発表

1.はじめに

2023年6月17日(日)に開催された一次審査(非公開、一次審査についてはARCHITECT8月号で報告済)を経て、去る9月9日(土)、「西尾市生涯学習センター(仮称)設計者選定設計競技(以下、西尾コンペ)」の最終審査が西尾市コンベンションホールを会場として開催された。

西尾コンペの概要は、敷地面積約8300㎡、延べ床面積約2600㎡、工事費18億円強(外構込み)、供用開始2027年4月予定で、老朽化した既存の2施設を集約・複合化し、西尾歴史公園の南に接する三角形の敷地に生涯学習センターを新築するものである。西尾コンペの特徴の一つが、コンペの運営体制にある。具体的には、コンペを担う行政に対して、JIA東海支部で組織されたワーキンググループが専門家支援組織として協力する体制がとられている。日本の公共施設の設計者選定において、価格競争方式が71.2%、プロポーザル方式が21.1%、設計競技方式が0.3%と、いわゆる入札方式が圧倒的多数という状況となっている(「官公庁施設の設計業務に関する実態調査の結果2021」全国営繕主管課長会議、R4.5より設計者選定方式の割合を件数ベースとして筆者算出)。そうした中、行政担当者の負担の大きさから避けられがちな設計競技方式を開催できた背景として、行政と専門家支援組織の協働があった。

さらに、西尾コンペでは、応募者の参加資格要件を大幅に引き下げ、登録建築家であれば実績に乏しい若手建築家でも応募できる要領として、広く優れたアイデアを募り、市民のために「質の高い、優れた建築」をつくろうとした西尾市の英断があったことも見逃せない。

ところで、メディア等の記事で時折見られるハコモノ行政批判だが、質(優れたデザイン)ではなく、価格の安さで設計者を選定してきた当然の帰結であって、むしろ設計者選定方法に批判が向くべきではないだろうか。ただ、行政担当者の立場に立てば、議会や上層部への対応が求められる等の業務負担の増大が懸念されるだけではなく、明治、大正、昭和に渡って国の発注を定めた「会計法」、地方自治体の発注を定めた「地方自治法」において明記された「建築発注は原則価格入札に付さなければならない」という条文を前に、入札方式に傾くのも理解できなくはないが。。

翻って、近年の日本社会における少子高齢化、国際競争力の低下、中心市街地の疲弊など、複雑で困難な現況を考慮すれば、単なるハコモノを供



公開プレゼンテーション 会場での審査風景(※)



千田建築設計案



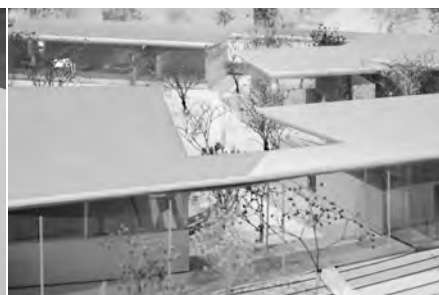
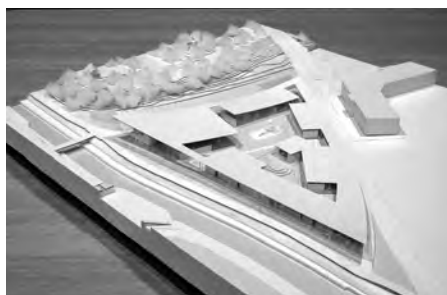
タトアーキテクツ案



砂越陽介一級建築士事務所案



株式会社ihrmk案



斎藤信吾建築設計事務所案



千田建築設計・千田友己氏



千葉学委員長



タトアーキテツツ・島田陽氏



砂越陽介一級建築士事務所・砂越陽介氏



加茂紀和子委員



小野田泰明委員



ihrmk・井原正揮氏



斎藤信吾建築設計事務所・斎藤信吾氏



手塚由比委員



伊藤恭行委員

給し続けるのではなく、質の高い、優れた建築によって創造的で豊かな生活を送るための基盤整備が急務ではないだろうか。

2. 公開プレゼンテーション

最終審査は、前半に公開プレゼンテーション、後半に非公開の最終選考という構成で実施された。一次審査では、152案もの応募作品を集め、応募者（設計者）の西尾コンベにかけられる熱が、選定委員会の千葉学委員長、伊藤恭行委員、小野田泰明委員、加茂紀和子委員、手塚由比委員をはじめ、西尾市事務局、JIA西尾コンベWGにも、ひしひしと伝わってきた。一次審査では、第一回目の投票で16案、第二回目の投票で8案に絞られ、最終的に5案が最終審査のプレゼンターとして選定された。

そして迎えた、9月9日の最終審査当日、くじ引きで決められた順番に従って、会場に迎えた多くの来場者（約100人）のもと、前半の公開プレゼンテーションが行われた。応募者順に、プレゼンテーションを行い、続いて各委員より質疑応答が行われた。以下に応答の概要を示す。

(1) 千田建築設計

[プレゼンテーション] 建築面積を最小化／コンパクト化して、既存の遊具や機関車などの公園施設をできるだけ活かした提案。建築面積を最小化したもう一つの利点として、液状化の恐れがある敷地の制約が挙げられた。建物規模は鉄骨造6階で、下層階には制振ダンパーを設けて耐震性を向上させている。また、作り手と使い手が一体となって合意形成をはかる提案がなされた。

[質疑応答] 上層階への利用者の上げ方、とりわけ子供に対する負荷が少なくないこと、各階の目的が明確であることによる自由な移動の少なさ、鉄骨量が縮減するという提案の意味、貸し室上階に体育館を置いたことによる音問題、内部へのアクセスの良さの反面としての入館者の管理方法、利用者数を考慮した縦動線の容量、屋上に機械室を上げたことによるメンテナンス性、外部仕上げ、などについての質疑があった。

(2) タトアーキテツツ

[プレゼンテーション] 繊細な心配りや相互の距離感が必要な機能を有する施設の性格に配慮して、静かなプログラムから賑やかなプログラムに分節する形式として、城下町の鍵の手のように雁行する配置によって構成した提案。上部には、西尾らしい屋根として足掛け屋根を頂き、住宅スケールに相応しい室としてあゆみ学級が提示された。雁行形式は外部に複数のスペースを生み



出し、様々なイベントに対応する。また、地下水の利用や地域のNPOを含めたチーム編成が提案された。

【質疑応答】細やかで軽快な設計、井水を使った外気導入効果が評価された一方、1階事務室の自然採光・自然換気の困難さ、伝統的な切妻屋根を連続的に用いる意匠的な意味、谷樋の連続による雨水処理の難しさ、個々のスペースが分かれており多数の利用者が集う印象を持ちにくい閉鎖感、などについて質疑があった。

(3) 砂越陽介一級建築士事務所

【プレゼンテーション】三角形の敷地の3つの頂点を持ち上げ、なだらかに繋げて、全体が公園のような場／パークプレートとして計画された提案。敷地近傍の文教施設、グラウンド、歴史公園とも緩やかに接続される。公園としての屋根面は芝生で、部分的に高木が植栽される。内部空間はパークウィンドウと呼ばれ、地域交流センターや総合教育センターが、適度な距離を保ちながらゆるやかに共存する。

【質疑応答】「ランドスケープと建築の一体化が魅力的」と評価された一方、豪雨による土の流出の懸念、芝生の刈り込み頻度、屋根面の止水の問題、半屋外としての軒下空間の少なさ、ガラス張りの運動室の機能性、車椅子利用者には困難な急勾配、屋根面の開放性に対して廊下の閉鎖性、パークウィンドウのあり方／適切さ、について質疑があった。

(4) 株式会社ihrmk

【プレゼンテーション】3つのプログラムが適度な距離感でつながり、一棟でも分棟でもない、5つの外部空間を持つ、多元的な平屋としての提案。屋根は、切妻でありながら、Y字状にジグザグにつながり、さらに三河木綿を参照したエプロシカル構造により複雑な架構となる。エレベーター不

要による維持管理の容易さから平屋が選択され、防災計画として中央部を耐火構造とし、また屋根に住宅用の一般流通材を用いる構造計画のほか、要領では既存のままとされた公園トイレを川側に移設する提案がなされた。

【質疑応答】「明快で奥行きのある場所の特性を捉えて」おり、平屋であること、屋根の構造について、評価がなされた。その一方で、駐車場の台数、トイレの分割、軒下空間の少なさ、荷重を受ける柱の位置と架構の考え方、屋根の納まりと雨水処理の方法、間仕切りと構造の整合性、機械室の考え方、について質疑があった。

(5) 斎藤信吾建築設計事務所

【プレゼンテーション】「それぞれが独立したフルーツポンチ型」に対して、「混ざり合ったミックスジュース型のスペース」という見立てのもと、コンセプトが表現された提案。プライバシーが求められる室（フルーツポンチ）と交流を促す空間（ミックスジュース）が離散的に配置され、それらがひとつの三角形の大屋根によって繋がった一体的な形態が与えられた。外周を内部／外部の回廊で囲みながら、すべての諸室は中庭に面し、また、建物の表と裏にそれぞれ正面を持つ構成は、内外に開きつつ、かつ閉じられた落ち着き感も得られる両義的な空間として提案された。

【質疑応答】居心地や中庭での活動が評価された一方で、公園と建物の一体化の困難さ、ガラス建具の高さ(6m)、内外のバッファ一部分の熱的性能、屋根の薄さの現実性、コストへの懸念、離散的配置による管理上の難しさ、偶発的な出会いの希薄さ、について質疑が上がった。

3. 非公開 最終審査

5者からの公開プレゼンテーションを終え、選定委員会による非公開の最終審査が行われた。千葉委員長の提案のもと、前半のプレゼンテ

ーションと質疑応答を振り返って、改めて各委員から意見を述べた上で絞り込んでいくこととなった。

(1) 千田建築設計

評価点として、垂直に高く積むことで、今までにない体験として高い視線が得られ、象徴的存在になること、機関車を動かさずにランドスケープを広く取れることが述べられた。一方で、利用者がエレベーターで移動する困難さ、内部と外部が明確に分かれていることによる交わりの少なさについて、指摘があった。

(2) タトアーキテクツ

評価点として、住宅スケールの屋根が繋がることによる風景的／空間的な魅力が述べられた。一方で、屋根形態と内部空間の乖離、外部に対する閉鎖的印象、廊下の暗さ、内部空間の分かりにくさ、貸室の割り切り、室の目的が明快な配置による利用者同士の交わりの希薄さについて、指摘があった。

(3) 砂越陽介一級建築設計事務所

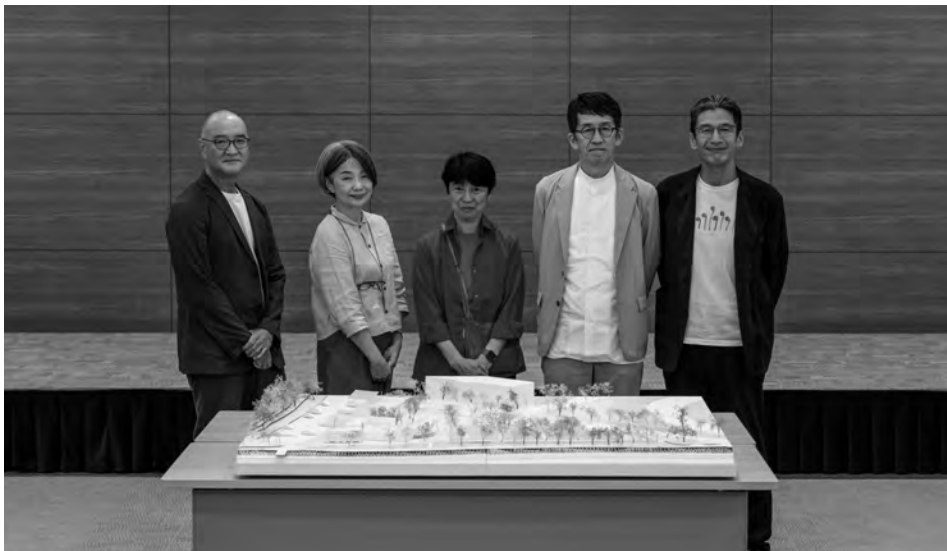
評価点として、公園と建物を一体化するアイデアの良さ、骨格の強さが述べられた。一方で、広い面積の屋上を自然と繋げることは是非、地面との接続部の少なさ、屋根面を人工地盤として成立させる技術、水処理の問題、内部空間としてパークウィンドウの割り切り、KIBOUやあゆみの独立性の高さについて、指摘があった。

(4) 株式会社ihrmk

評価点として、一つのスキームで全体を構成する明快さ、緩やかに繋がる中央の空間による全体の雰囲気を感じられる構成、プランニングの良さ、が述べられた。一方で、構造とプランニング／形態の整合性(足し算的なあり方)、構造家との意思疎通、木造架構による複雑さ(防火区画、防



西尾市 中村市長に報告を行う千葉委員長



設計者選定委員:左より、伊藤泰行氏、加茂紀和子氏、手塚由比氏、千葉学氏(委員長)、小野田泰明氏

火シャッターの増加、コスト増)など、構造に関する指摘が多く挙がった他、軒下の小ささについて、指摘があった。しかし、複雑な構造を単純にしても案としての魅力は失われないとの応援演説もあった。

(5) 齋藤信吾建築設計事務所

評価点として、建築と広場(公園)が融合された魅力を有する点、通り抜けができる点が述べられた。

一方で、分棟による平面計画の困難さ(周りを回遊できるようでいて分断されている)、管理上の煩雑さ、屋根との間の欄間、コストについて、指摘があった。また、提案者に案を柔軟に展開する力があれば可能性が高く、飛躍的に楽しくなりそうな案であるとの発言もあった。

4. 第一回投票

以上、各案の振り返りを終え、千葉委員長の提案のもと、各委員より2案ずつ投票することとなった。結果として、以下の3案に票が入った。

	千葉	伊藤	手塚	小野田	加茂
1 千田建築設計		○			
2 タトアーキテクト					
3 砂越陽介一級建築士事務所		○			
4 株式会社 ihrmk	○		○	○	○
5 齋藤信吾建築設計事務所	○		○	○	○

千田建築設計案については、高層案として、現実的なコストを考えると、ランドスケープに手をかけないことで妥当性があると評価されたものの、この規模でエレベーターを2機、設けることの懸念が示された。

ihrmk案については、プランニングは良いものの、内部空間が単調になってしまう懸念の他、構造とプランニングに関する整合性やリアリティ、構造的な架構の作業量の膨大さ、について指摘があった。

齋藤信吾案については、庭が豊かで、様々な場所が生まれる予感/期待が述べられた。

5. 第二回投票

以上の議論を経て、残った3案に絞って、挙手にて最終投票を行った。結果として、ihrmk案に1票、齋藤事務所案に4票、と大きな差があらわれた。

	千葉	伊藤	手塚	小野田	加茂
1 千田建築設計					
4 株式会社 ihermk					○
5 齋藤信吾建築設計事務所	○	○	○	○	

ihrmkは伸びやかで綺麗であることが評価された一方、構造に対する懸念が拭いきれなかった。その一方、齋藤事務所案は左右で分断した平面計画を改善するなど、課題はあるものの配置構成の変更で十分に対応可能と判断され、「この場所ならではのものになりそう」として新しい解き方に対する高い評価が下された。

西尾市事務局側から高さ6mのガラス張り建具、屋根の材料、準防火地域への対応、将来的なコンバージョンの可能性、などについて懸念の指摘が挙がったが、選定委員よりそれぞれ技術的には対応可能であるとのコメントが返された。

最終的に選定委員の総意により、最優秀案として齋藤事務所案が選定され、次点としてihrmk案、その次に千田建築設計案が続く結果となった。

6. 市長報告

以上の結果を受けて、千葉委員長から西尾市長および教育委員長へ、選定委員会の報告が行われた。最優秀案をはじめとして、各案について議論の経過を報告し、評価のポイントについて要点が伝えられた。最優秀案については、特に詳細な報告がなされたが、要領では存続させることが条件であった既存トイレについて、やりかえの可能性について補足コメントが加えられた。補助金との絡みがあるものの、この機会にトイレを本体に含めて一新する利点について委員より補足説明があり、今後、市としての検討が望ましいとされた。以上をもって、最終審査の一切が終了となった。

7. おわりに

最終審査を振り返って、「自分の設定した問題に対してどこまで答えているかが一番大事」という千葉委員長の言葉が強く印象に残った。同様の言葉として一次審査でも、「課題に対する問いの設定とそれを乗り越える方法の提示」が大事であると述べられた。JIA西尾コンペWGによる一次審査前の事前チェックにおいて、三角形の敷地いっぱい三角形の屋根をかけつつ、中庭でヴォイドをつくる構成によって、建築と広場の新しい関係性をつくり出すカタチの操作が152の応募案の中でも際立っていたのが齋藤事務所案だった。KIBOUやあゆみなどのデリケートな用途を同居させる難しいプログラムに対して、繋がりつつ離れる、開きつつ閉じるという問いを設定し、従来の「フルーツポンチ型」に対する「ミックスジュース型」として、分棟でありながら、広場に巡らせた三角屋根で繋げる、という答えを示した案と理解した。

こうした解き方が、入札方式では得ることが難しいことは間違いないだろう。竣工の2026年度末に向けて、提案の実現のためにはさまざまな困難が待ち受けていると予測される。しかし、「質の高い、優れた建築」の供給が、創造的で豊かな生活を送るための市民の基盤となるとともに、「会計法」「地方自治法」で記された不可思議な条文に基づく設計者選定方法を改革する契機となることも期待したい。

(※以外の写真は©トロロスタジオ)

脇坂 圭一 (JIA愛知)

静岡理科大学
西尾コンペ支援業務
ワーキンググループ委員



～ 零三工作室 東福大輔、山上建築設計 山上健 座談会 ～

零三工作室の東福大輔氏、山上建築設計の山上健氏をお招きし、BIMと創造性についての座談会を行いました。

BIMが切り開く新たな創造性 第6回(最終回)はその内容をお伝えします。

<自己紹介>

横関:今日はBIMが切り開く新たな創造性について座談会を行いたいと思います。ではまず自己紹介から。東福さんからお願いします。

東福:東福大輔と申します。名古屋大学の大学院を卒業した後、鹿島建設に7年弱勤めました。その後、磯崎新アトリエに入り、5年弱勤めました。磯崎さんのところでは中国で美術館をほぼ一人で監理していました。その後、中国で設計事務所を立ち上げ、全部合わせて約10年間中国に滞在し、その経験は著作にまとめています。当時、北京オリンピックで多くの設計事務所が集まっていて、世界各地の設計事務所との交流があり、非常に面白い時期でした。

ただ、中国では疲れることが多く、約8年前に日本に帰国しました。帰国後、笠寺観音のプロジェクトを手がけることができました。そしてBIMをそろそろ始めなければならないと考え、現在は山上さんと一緒に別のプロジェクトを手がけています。あと、ライノセラとグラスホッパーを大学で非常勤講師として教えています。

横関:ありがとうございます。では、山上さん、よろしくお願いいたします。

山上:山上建築設計の山上健です、よろしくお願いいたします。名古屋大学を出て、少しかだけRIAに勤めてから、名古屋の伊藤建築設計事務所という所で修行しました。その伊藤に在籍中にですね、2008年ごろにArchicadというBIMソフトをちょっと使い始めました。2～3年使ってみて、「これはいけるぞ」となって、2011年1月からArchicad一本に絞ってやっています。

人よりも早い時期からArchicadを使っていたので、グラフィソフトから声が掛かって、Archicadを実際に使っている事例の紹介などで全国を回っているうちに、グラフィソフトの認定コンサルタントという立場になりました。認定コンサルタントは全国で20人くらいいると思いますが、中部では僕一人です。あとグラフィソフトのスクールの講師をやっていて、これはWEBなので全国の人を教えています。一応、BIMコンサルティングみたいなこともやっています。他には東福さんのお仕事をお手伝いしたりもしています。

横関:ありがとうございます。

<BIMが建築に何をもたらしたのか>

横関:では、まずBIMが建築に何をもたらしたのかというところをお話いただければと思います。では、お願いします。

山上:設計者にストレスとプレッシャーをもたらしました。(笑)

東福:そう。いずれそういうストレスは減っていく方向に開発はされていくのでしょうけど、なんでこんな簡単なことがこんな大変になってしまうのかという疑問が湧いてくるアプリですね。海外で生まれたBIMやCADを日本に持ってくるときに、日本の事情に合わせてローカライズをしなくてはならない。それは大変な作業だと思います。それを抜きにして考えると、日本でいえば、BIMが教育現場等で使われたり、新人教育で使われると一番変わるであろうことは、構法に対する知識じゃないかなと思っています。

要は大学卒業して会社に入ってしばらく経つまで、LGS下地に石こうボードを貼るなんて知らないわけじゃないですか。レムコールハースも「LGSが建築史で軽視されている」みたいなことを言っていたと思いますけれど、空間を作る上では、実際にはRCよりもLGSの方が圧倒的に多いわけです。でも、日本では、建築教育ではあんまりやらないんですね。構法教育を充実させないことの良さっていうのが、日

本の建築教育の良さなのかもしれませんが、やはりその圧は増していくんじゃないかなという事は予想できます。

横関:そうするとBIMが建築にもたらしているものの一つが、教育に構法を持ち込むことだと。

東福:要はプロとしてトレーニングを受けるといのは構法を覚えるってこと。それを先行して教えるっていうか習得するようなことが起こるんじゃないかなと。

横関:なるほど。BIMは建築情報が付いた立体データを持つようになる。グラスホッパーなどの自動生成を行うようなものと相性がよくなってくれそうです。その辺りから建築にもたらさそうなのはありますか。

東福:色々実験はしているんですけどね。BIMのデータを書き出す方法がまだよく分かってない。彫刻とかそういうような建物の中にあるオブジェクトレベルだったら十分できますね。

横関:自動化させるプログラムとBIMをどう連結させるのか。そこがまだ弱くて上手く使えていない。

東福:そうですね。それができるのは

零三工作室 /
東福 大輔 Tofuku Daisuke



Visual ARQ2しかなくて。それを持っている人は僕は一人しか知らないんですよ。その人も使ってない感じなので、おそらくVisualARQ2は日本の建築事情にまだローカライズされていない。そうするとみんなやっぱり使わなくなっちゃう。そういうようなデータの連携がうまくいくなればもっとできると思うし、もっと普及していいよねといつも思っています。

横関:ありがとうございます。では、話を広げましょうか。

山上:東福さんは教育に構法がもたらされるとおっしゃいましたが、僕はそうは思わないです。このままいくんじゃないかなって。例えば僕の大学でも、BIMを教えるんですけど、大学って本質的にはBIM教育って要らないかなと思ってて。

横関:そのあたり詳しく教えてください。

山上:東福さんはライノやグラスホッパーを教えていますよね。そっちでいいって思って、構法よりも、今の大学の教育を肯定しているというか。例えば早稲田とかだと絶対実務からって校風がありますけど、少なくとも僕がいた頃は名古屋大学はそういう校風ではなかった。名古屋大学の良いところと悪いところを色々と考えてみると、構法とかじゃなくて、建築の概念的なところを教えてもらったっていうのは良かったかなと思ってます。

東福:僕もそう思っているけれど、むしろ僕が言いたいのはBIMっていうのは構法を教えるツールとして教えないと意味がないということ。

山上:そうですね。もし構法とセットで扱うのなら、BIMを大学で教える意義もあると思います。

東福:私が大学に居たころ、構法の授業は正直ひどかったんですよ。絶対構法の知識ない先生が教えていた。だからこそ、BIMを教えたのなら構法の授業と組み合わせるべきだと言ってるんですよ。

山上:その話は以前から東福さんと何度かしてきて、僕も同意してきたんですけど、よくよく考えたらちょっと違ったなと最近思っ。そもそもBIMという言葉が今めっちゃくちゃいろんな意味で使われるので、BIMソフトのことをBIMって言ってるのか、それともその先にあるすべての世界をBIMと言っているのかグッチャグチャじゃないですか。

で、今東福さんがおっしゃったのはBIMソフトの話なんですよ。BIMソフトと構法をセットで扱うべきということには以前と変わらず同意なんですけど、ソフトの使い方とかじゃなく、BIMという言葉が示している未来の世界の考え方とかを知るのなら、構法とセットにしないでいいかなと最近思うようになってきました。つまり、今行われているような形でBIMソフトの使い方を大学で教える必要はなくて、構法とセットなら意味はある。それとは別の観点で、ソフトの操作方法ではないBIMの広範な概念を教えるのであれば、大学で教える意味はあるかも知れない。

横関:建築の設計では、コンセプトを組み立ててそれを実現するプロセスを踏みます。東福さんはBIMでやることによってその後半の知識が、教育に前倒しされていくというようなイメージをされている。逆に山上さんは、実現化に進んで行くに決まっているので、大学教育では前半に重心を置いて教育をするべきだというようなイメージ。その辺どうでしょうか。

山上:やっぱり大学の教育の大事なところって、設計事務所に入ってから教えてもらえないこと、良い設計事務所、例えば、組織事務所やアトリエとかで、トップレベルの本当にトップの人たちとかに、教えられるような概念的なことというのは、普通の事務所で教えてもらえないですよ。

RIAに入って結構期待したんですけど、あんまりそういうことは出てこなくて、大学で先生に言われたようなことって、誰も言わない。やっぱりそういうことは大学で教えないといけないなって思ったんですよ。そっちに時間を割くほうがいいなと思って。

BIMっていうのは設計を考えるツールじゃないと思っています。考えるのはまだやっぱりライノセラスとかグラスホッパーの方がいい。だから大学生はそっちやればいいじゃんって僕は思ってるんです。

BIMはグッチャグチャって言いましたが、そもそもBIMってあんまり定義できないものなんですよ。だってコンピューターで建物の情報がデジタルになってるだけの話ならBIMソフトの話なんですよ。でもBIMっていう概念は、それ自体はもうなんかプラットフォームとかインフラみたいなもので、「BIMだから何、じゃあどこまでBIMなの」という話じゃないですか。



山上建築設計 /
山上 健 Yamagami Takeshi

この連載の杉田さんのお話の中で、建築のデジタル化なのかBIMなのかよく分からないみたいなお話がありましたけれど、まさにそうですね。BIMという言葉が本当にふわふわしてて、狭義にはBIMソフトだけのことを指して使われていますが、広義にはもっとずっと広い概念としても使われていて。だから「BIMだからどうこう」って言われてもよくわからない。正直話しにくい。

横関:では、何か建築が変わったと実感するものがあるとしたら、BIMのどの部分がそれをもたらしたと言えますでしょうか。

インタビューの続き、は↓以下のアドレスからご確認いただけます。



<https://flowworks.jp/bim-creativity-6/>

横関 浩 (JIA愛知)
スタンスアーキテクト
フローワークス



JIA東海支部 5年間の軌跡

東海支部

東海支部 建築設計競技
金賞作品

東海学生卒業設計
コンクール金賞作品

JIA東海住宅建築賞
大賞／最優秀賞

地域会

静岡

愛知

岐阜

三重

JIA

社会の出来事

2018 災

- 第35回東海支部建築設計競技
「〈帝国〉と向きあうわたしの住まい」
家成俊勝氏 記念講演会
- 第25回東海学生卒業設計コンクール
- 第6回東海住宅建築賞
- 講演会「東日本震災復興に学ぶ」[2/2]

第35回 設計競技 金賞
「命のおわり・はじまりの家」
齊藤 知真 (信州大学大学院)

第25回 金賞
「始終のまなび」
伊藤 誉 (名古屋工業大学)

第6回 大賞
「毛鹿母の家」
浅井 裕雄・吉田 澄代 (裕建築計画)

- 建築ウォッチング
(アルヴァ・アアルト国際巡回展と葉山のアートめぐり)
- JIA塾 (全3回)

- 建築家セミナー 東利恵氏講演会
- JIA建築ワークショップ@豊橋 (全2回)
- 名古屋市猪高小学校建築教室 (全2回)
- 連続講演-住宅のつくりかた。(住研)
- 建築セミナー (愛知県建築住宅センター)
- 設計業務等の損害賠償保険研修会
- 建築基準法学習講演会
- JIA実務セミナー
- 素材を訪ねる旅「南山の邸宅にて左官を学ぶ」
- 東海住宅建築ツアー「近畿支部と連携」(住研)
- 名古屋市立大学授業「建築家の仕事」(全15回)

- JIAの窓 手嶋保氏講演会
- 建築研修会 サンレー工場と若狭町年縞博物館

- 森羅万象匠塾
「ドローンを使つての防災活動」山田義郎氏
- 建築文化講演会「建築と環境と人間」小堀哲夫氏
- 環境セミナー
「風のかたち熱のかたち建築のかたち」末光弘和氏
- 建築ウォッチング
「熊野古道と「にほんの里百選」須賀利の旅」
- 福島視察「震災復興 福島の現況」
- 三重短期大学 出張授業

- 建築家大会2018東京開催
- アルカジア東京大会2018開催

- 西日本豪雨 (死者200人以上)
- 日産ゴーン会長を逮捕
- 流行語大賞「そだねー」

2019 令

- 第36回東海支部建築設計競技
「辺境で、AIと死者と暮らすー外側で生きること／
他者と出会うことー」
辻塚唐氏 記念講演会
- 第7回東海住宅建築賞
- JIAゴールデンキューブ賞2019/2020を主幹
- JIA東海支部大会2019けんちくカフェス「此処へ〜」
[9/23-28]

第36回 設計競技 金賞
「補陀落渡海」
富樫 遼太・澤田 郁実 (早稲田大学大学院)

開催せず

第7回 大賞
「SLBH4」
河合 啓吾 (株式会社TAB)

- 建築ウォッチング(アイカ工業ショールームと
名古屋の最新建築ウォッチング)
- JIA塾 (全2回)

- JIA建築ワークショップ@豊橋 (全2回)
- 日本の常識が通じない?
シャンさんによる中国建築設計事情講演会
- 知らないで損!改正建築基準法 勉強会
- 名古屋市立猪高小学校建築教室 (全2回)
- 名古屋市立大学授業「建築家の仕事」(全15回)
- 連続環境セミナー (全3回) (住研)

- JIAの窓 岐阜の若手建築家住宅見学会
- 建築研修会
苗木城跡と多治見モザイクタイルミュージアム

- 森羅万象匠塾
「南天にひろがれ宇宙ロマン」福井康雄氏
- 建築文化講演会「人を愛する建築」大西麻真氏
- 環境セミナー「Building Physics in Arup」清野新氏
- 建築ウォッチング「瀬戸・多治見 やきもの三味の旅」
- JIA東海支部持出席員会
伝七郎及び四日市旧港湾施設の見学
- 三重短期大学 出張授業
- 地域会報アーキテクトみえ30・31号発行

- 建築家大会2019青森開催
- 「SDGs 建築ガイド日本版」を刊行

- 業務報酬基準 国土交通省告示第98号制定
- 新元号「令和」に
- ノートルダム大聖堂で大火災
- 首里城火災
- 流行語大賞「ONE TEAM」

本号は、JIA建築家大会2023東海in常滑の開催に合わせ、東海支部の活動を紹介する特集号としました。
5年前の東海支部設立30周年記念号(2018年1月号)に掲載した東海支部10年の軌跡に続く5年間の軌跡を掲載し、東海支部、静岡地域会、愛知地域会、岐阜地域会、三重地域会の主な活動を紹介します。川本直義(JIA愛知)



建築家を志す学生に向けて

■東海支部設計競技の歴史

東海支部が主催する設計競技は、支部では最も歴史ある事業として1984年に第1回が開催され、本年2023年で第39回目を数えます。

本設計競技は、審査員長が出題した設計テーマ(住むこと・居住・住処・住宅(家))についてA2プレゼンシート1枚に提案を求めものです。応募資格は設定しておらず、全国各地からの学生・院生、若手設計者を中心とした提案をいただいています。

第1回(1984年)から第10回までは『住まいのソーシャルプランニングを探る』、第11回(1994年)から第15回までは『素材を活かして街に仕掛ける』、第16回(1999年)から第20回までは『場所に問う』、第21回(2004年)から第25回までは『和の遺伝子を探る』、第26回(2009年)から第30回までは『風土を見る』について、設計競技のシリーズテーマとして募集を行いました。

■提案者と審査員が共に考える場

第31回(2014年)からは、シリーズテーマを設定せず、社会性が高く時事性のある問題からテーマを設定する方針とし、建築を取り巻く社会背景や課題について提案者と審査員が共に考える場としての設計競技を実施しています。東海支部設計競技特別委員会では、『建築家・JIA会員と学生・若手建築家との対面での交流』、『公開審査会による審査員と提案者の議論』を重視し、運営しています。

2020年初頭からは、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、私たちの暮らしは一変し、『新たな生活様式』を余儀なくされました。自然災害やコロナ禍などの切実な課題に対しては、JIAは建築が本来持っている前向きな推進力で、新しい社会のあり方を提案・創造すべき使命があるのではないかと考えています。本委員会は、今後も住まう空間の多様性や建築の可能性を共に考える場を意識しながら展開していきます。



■第39回東海支部設計競技の開催

2023年の第39回設計競技2次公開審査・表彰式・記念講演会は、12月2日(土)大名古屋ビルヂングTOTOプレゼンテーションルームに於いて開催します。第39回の設計競技のテーマは、橋本雅好審査員長(相山女学園大学准教授)より『超空想住宅へ』として出題されました。記念講演会は、中山英之ゲスト審査員(東京藝術大学准教授/中山英之建築設計事務所)よりご講演をいただきます。ぜひ会場にて対面参加いただければと思います。



www.jia-tokai.org/competition/top.htm

間瀬 高歩 (JIA愛知)

地域計画建築研究所
設計競技特別委員会委員長



JIA東海住宅建築賞

5年間のJIA東海住宅建築賞を振り返って

東海住宅建築賞の特色は大きく3つあると思います。応募する建築家が作り、建築家が審査する賞である点、競争だけでなく交流の場であること、そして毎回記録集を出版している点です。建築のジャーナリズム受難の時代に、地域で自前の批評の場を持つことは意味があると思います。2013年度の第1回から9冊(現在10冊目を編集中:編集の中心は静岡理科大学・脇坂圭一氏です)の記録集が出版されています。後世でこの記録集を振り

返った時に東海の住宅建築の全てではないですが、大きな流れや変化が読み取れば良いと思います。以下最近5年間の変化を表にまとめました。

おぼろげながら見えてくることは、個性的で豪華な建築家の審査員なのに応募数が減少している事です。(第10回2023年度も17作品でした)原因は住宅建築賞の評価が回を重ねるごとに上がると共に、応募のハードルも上がってしまったことです。また、1次のポスター

セッションでは「構成的」な作品や「コンセプトual」な作品の評価がどうしても高くなります。反面、現地に行かないと伝えにくい「光や空気などの空間の質」にこだわるような作品の評価が低い傾向が影響したのかもしれませんが。

また、大賞受賞者は東海地方の建築家が占めていることから、この地域の住宅における建築家のレベルの高さを示しています。残念ながら入賞されなかった応募者の中にも、地域を変えていく潜在的な建築家のパワーを感じます。今後とも応募者の意見をお聞きしながら運営してまいります。運営委員の数は年々減少して高齢化しています。深刻に考えるのをやめました。「東海住宅建築賞は日本の建築界の縮図になっています」

	第6回 2018年度	第7回 2019年度	(コロナ禍で中止) 2020年度	第8回 2021年度	第9回 2022年度
応募者数	40	38	0	24	24
審査員 (敬称略)	塚本 由晴 鍋島 千恵 末光 弘和	西沢 立衛 福島 加津也 木村 吉成		山本 理顕 中山 英之 島田 陽	原田 真宏 浅井 裕雄 大西 麻貴
大賞受賞者 所在地	東海	東海		東海	東海
運営委員数	20	19		12	9

吉元 学 (JIA愛知)

ワークキューブ/愛知淑徳大学



JIA東海学生卒業設計コンクール

建築文化の未来を担う若者に価値ある卒コンを目指して

JIA東海学生卒業設計コンクールは28回続く、支部活動の中でも歴史のある活動のひとつです。社会で活躍する建築家と学生たちとの交流の場として、この地域で建築を学ぶ学生たちの成長を支援できればと活動を続けています。

しかし、これまでの活動が必ずしも順風満帆であったわけではありません。少しでも学生たちに価値のある活動になればと、毎年、改善を続けてきたことにより、気づけば、かなり大掛かりなコンクールになっていました。2018年は金山の都市センターで2週間の模型展示と公開審査を開催しました。会場設営から模型搬入出時の立会い、展示期間中の受付、審査会の準備、運営まで、実行委員の負担はかなり多くなっていました。また、会場費などの経費も膨らんでいま



た。さらに、この地域の別団体の卒コンや全国的な卒コンがいくつもあり、JIA東海支部として卒コンを行う価値があるのか、どのような開催方法がその価値を高めるのかななどを0から考え直すために、25回の節目のあと、実行委員会は一旦解散になりました。

そのまま時間だけが過ぎ、2019年は残念ながら卒コンを開催することができませんでした。このまま消滅する危機にあった2020年、全国卒コンが本部事業に正式に位置づけられたのを契機に、当時の支部長の呼びかけで、東海卒コン再開に向けた有志による検討が動き出しました。本来、中止に至った課題も踏まえ検討すべきでしたが、とにかく学生たちに発表の機会を用意することを最優先に準備を進めました。有志のみなさんが審査方法・募集方法・提出物の検討、審査会場の確保、審査員への依頼、フライヤー作成、協賛依頼など様々な検討や調整を進めていただき、審査会を開催できるところまで来ました。3月には東海支部の承認も得られ、あ

とは実行に移すのみとなった矢先、コロナ禍に見舞われ、行動制限される中、開催を断念しました。結果的に2019・20年の2年間、学生に東海および全国のコンクールへの参加機会を用意できなかったことは非常に残念です。

そして、2021年はコロナ禍でオンライン配信による審査を試行し、何とか3年ぶりの開催にこぎつけることができました。2022年の2次審査は対面とオンラインの両立を行い、今年は今会場に模型を持ち込んでの対面とオンラインの両立で開催しました。このように手探りの中、ようやく新たなスタートを切ったところです。改めて公益社団法人JIAが主催する卒コンの意味をみなさんと考え、この地域の未来の建築文化を担う若者たちにとって価値のあるコンクールとしていきたいと思っております。是非ご協力をお願いいたします!

奥井 康史 (JIA愛知)
石本建築事務所



建築ウォッチング

静岡

建築ウォッチングのこれから

静岡地域会で開催されてきた建築ウォッチングは、当初一般市民向けのバスツアーとして、歴史的建造物、会員設計による公共建築等の見学が主流でした。大型バス40名以上の応募があり、会員数名で対応するハードな企画でした。その後会員主体のウォッチングとして変化をし、過去には図書館、教会、大学など各々をテーマに、関東方面を中心にその歴史を辿る企画など提案してきました。

この5年間はコロナ禍における移動手段の問題、現地でのリアルな見学体験など他のイベントとは違い行動を伴う性格上、休止を余儀なくされておりました。それでも前段の2件は実施しており、神奈川県葉山界隈の建物めぐり、(加地邸、山口蓬春記念館)などを中心に企画しました。参加者34名の内半数の17名は一般の方からの募集があり、それまでの会員主体とは異なる結果となりました。今年夏の企画は、八ヶ岳高原音楽堂を主に界隈を散策する提案でしたが、こちらもほぼ半数の一般応募となり、バランスのとれたウォッチングが形作られてきました。このような企画で、会員外の方々との交流がスムーズになるよう今後とも提案をしてゆきます。

江川 静男 (JIA静岡)
ヴァイスプランニング



JIA塾

静岡

地域に開かれたJIA塾

2020年早春よりコロナ禍になり、今までの勉強会をどのように企画すればよいのかを悩んだが、全国的にZOOMが一般化したことで、静岡地域会のJIA塾も、ZOOM併用の会となった。ZOOM併用になったことで、JIAの会員だけの講習ではなく、静岡県の建築関係者向けの広告媒体でお知らせすることで、聴衆の2/3は会員外の参加のOPENな勉強会になっている。

講演のテーマも「静岡の建築にふさわしい内容」を軸に置き、講師もJIAの会員またはJIA静岡の協力会員が、得意な分野や日常の建築設計で自分自身にとって、ふと疑問に感じることをテーマにしている。「静岡型カーボンニュートラル」に始まり、『「広葉樹」と「地盤」について現状を考える』と題して、『地盤の種類と現状の地盤改良についての基本のき』を杭や地盤改良を施工している協力会の担当者に講演してもらった。これが想像以上によく、公益性の高い勉強会になっている。これからも、仕事をしていてふと悩む部分、最新の建築技術、静岡地域での建築の課題にフォーカスして、地域に開かれたJIA静岡の建築設計の望む姿勢を示したい。

高島 ゆかり (JIA静岡)
一級建築士事務所アトリエ結



「建築家の仕事」を生に聴く臨場感

JIA東海支部の建築家が建築を学ぶ大学生に向け講義をするJIA大学授業「建築家の仕事」は、2016年9月に久保田英之愛知地域会長(当時)の発案で開始された。名古屋市立大学芸術工学部建築都市デザイン学科3年生向けカリキュラムとして、毎年後期金曜2限目に開講している。8年目を迎えた今年度も9月24日から実施されている。他学科の学生を含む50名前後が受講の他、単位互換制度により他大学の学生受講も可能としてきた(22年度まで)。

90分×15回の授業を毎回1~2名の建築家が担当、最終回には受講生の提出物を介して相互の交流を図ってきた。教壇に立つ建築家は、建築作品の解説や学生時代からの建築への思いの変遷などを通じて自身で解釈した「建築家の仕事」について授業を組み立て、社会における建築、建築家の役割を語りかけている。

講師は広く支部の会員から募り、意図する

ことなく多様な建築家が集まる。個人、アトリエ、組織など、所属の違いによる仕事のあり様は自ずと学生に将来の選択肢を示す。計画・設計の対象は住宅から公共施設、まちづくりから保存活用、プロダクトから家具、ランドスケープから構造など多種多様であり、通常知りうる建築家像の固定概念を解き放つのに役立っている。また、女性建築家の登壇は、女子学生にキャリア形成上の手本となっている。

情報社会の中で憧れのスター建築家に接する機会こそ多けれど、建築設計を生業とし地域に貢献する建築家の考え方、仕事の作法



▲最終回、学生の将来展望を通じて対話する

に接する機会は意外と少ない。学生には、身近な建築家のリアルが伝わる授業として評価が高く、大学専属の教員からは決して学ぶことのできない貴重な体験となっている。コロナ禍が広がった2020年と21年度はオンライン授業とせざるを得ず、意思疎通の難しさと対面交流の大切さを相互が痛感した。

JIA大学授業「建築家の仕事」、講師にとっては、自身の過去や考え方を整理する良い機会となり、蓄積した経験を若者に伝える楽しさ、自分の知らない若者たちの考えを知る良き機会となっている。聴講する学生は、現役建築家の熱き語り口を踏み台に将来への展望を夢見ている。

鈴木 賢一 (JIA愛知)

名古屋市立大学



建築教室

お店をつくろう!~小さなまちづくりプロジェクト~

JIA愛知事業委員会の恒例事業となった豊橋での建築ワークショップ。コロナ禍で中止や縮小開催となった時期を乗り越えて、昨年引き続き、今年も豊橋まちなかの2つの小学校への授業から始まり、穂の国とよはし芸術劇場での展示・表彰講評と、通常開催2年目となりました。コロナ明け、これまでこんなにもいろいろなことやっていたのかと思うほど、日常が押し寄せています。もう決して若くはない。次へ伝え渡していくことの重要性をヒシヒシと感じております。仲間づくり、一緒に関わっ



▲穂の国とよはし芸術劇場PLAT(アーツスペース)での展示風景

てくれる人を増やすことが大事ですね。

事業委員会に所属して、アートイベント「Se bone」や僕の活動にJIAの事業として乗り出してくれました。独りでやっていた作業が分担され、手早く、ずいぶん「楽」になりました。それでも、自分でしかやれないと思って(しまつて)いることがまだまだあります。

2つの小学校から絵画300点、工作作品150点以上を慎重に運び、会場に並べ、審査をし、会場設営から展示作業をします。ここには、今やJIAのサポートが欠かせません。手早くなったとはいえ、丸2~3日の作業です。この間の作業は、CPD申請の対象にはならないとのこと。小学校の先生も夏休みのさなか、総出で作品運搬を手伝ってくれます。ひとつひとつ作品を運びながら「すごいなあ」、「これおもしろい」と感想を漏らしながら、自然とコミュニケーションが取れています。審査の場面では、画家や映像の専門家、行政のまちづくり担当課や劇場スタッフ、もちろん

我々建築家、会場いっぱい敷きつめた作品を前に皆からたくさんの批評が飛び交います。表には決してでないこれらのシーンこそ「大切な時間」であり「楽しい時間」です。様々な立場、様々な専門分野の方と接する機会に立ち会うことこそ、「建築家としての研さん」の場であるはずなのに。

「建築家+」という冊子づくりにも関わっています。「そのことに建築家を加えてください」というスタンスで「建築家」という職業・職能を一般の方に知ってもらいたい。「お店をつくろう!」がその機会のひとつづつづつあるな、と感じます。来年もきつと通常開催。JIAの皆さん、ご興味あれば、。

「建築家+」第3号:特集「のこす・なおす・つかう」は、近々発刊ですので、お楽しみに!

黒野 有一郎 (JIA愛知)

建築クロノ



JIAの窓

岐阜の建築家に開かれた窓

岐阜地域会では「JIAの窓」と銘打った事業を毎年開催しています。この事業は2012年に当時地域会長の長尾英樹氏が企画し第1回が開催され、今年で12年目をむかえます。JIAの窓というネーミングも長尾氏の発案によるものです。

「JIAの窓」には、岐阜県内で活動するJIA会員以外の建築家や建築を志す学生に窓を開く、といった思いが込められており、会員外の人との交流を目的としています。そしてこの事業が会員拡大に繋がるのがもうひとつの



▲JIAの窓初期の写真

目的です。初期の頃は、飲食店で会員と会員外の建築家が飲食をしながら各自の設計作品の紹介をしたり、建築談義に花を咲かせたり、フランクな交流の場として開催されました。その後「JIAの窓」は事業の冠名的な位置づけとなり、内容は講演会・建築見学会など多様になってきています。

参加者は参加者リストに登録され、以後JIAの窓開催の案内をお知らせします。現在の登録人数は80名を超え、学生や他地域会会員等を除いた20名程が実際の会員候補として名簿に登録されており、近年入会された会員の多くはJIAの窓がきっかけとなり入会しています。新しい参加者を動員するには、この地域であまり講演をされていない方の講演会や、住宅など個人では見学が難しい建物の見学会等が効果的であることが分かってきました。近年では20×20プレゼンテーション(ペチャクチャナイト)といった、複数のプレゼンターによるトークイベントも開催していま

すが、こちらは初期のJIAの窓で行った座談会に似た雰囲気も有り、参加者との交流が生まれやすいです。いずれにしても事業の後に懇親会を設け、懇親会まで参加してもらい事業の感想や続きの話を語り合う。そこまでがJIAの窓であり醍醐味です。

JIAの窓を通じて知り合った人たちは、JIA会員となった方、会員になってはいないが何回も参加して頂ける方、1度参加頂きご無沙汰の方と様々ですが、同じ地域で建築設計という共通の手法でクリエイティブな活動を続けている仲間の輪が「JIAの窓」を通じて今後も広がっていくことを期待しています。

山田 浩史 (JIA岐阜)

ヒロプランニング



アーキテクトみえ

いろんな三重の情報発信

三重地域会は当初から30名ほどの会員数で、南北に長い県内それぞれの異なる環境で地元根付いた活動をしています。各会員の紹介、地域会の活動を広めようと会報誌「アーキテクトみえ」を地域会創設の翌々年1989年から発行しています、

行政や学校などへ配布することを踏まえて、誌面は会員以外の方にとっても興味の内容となるよう、活動記録だけでなく特集記事を載せています。その特集テーマの専門的な見識が得られるよう外部の方にも執筆依頼をしています。基本的には記事は会員が分担して取材・撮影、執筆を行っています。

少し前は、街並みや見どころ案内など建築・街づくりに直接関係するものをテーマにしました。この取材内容は三重地域会で企画制作、一般販売した「三重の建築散歩」としてまとめ三重の建築ガイド本として好評を得ています。

その後は、地域の風土・文化を分析、活用する建築家の職能の一面を知ってもらえるよう、三重県内の祭り(世界遺産登録された時に合わせ)や伝統工芸品をテーマとして取り上げました。地元の知人から得た独自情報を盛り込み地元をよく知るものならでの記事となるよう努めました。伝統工芸品の編では三重県の協力もいただき、県のアンテナショップの著名なプロデューサーにも寄稿協力、県イベントでの一般配布など行政とのつながりを深める一役を果たしています。前回号では空き家の対策をテーマとし、県内各地の取り組みを

取材し、それぞれ先進的な事例があることが分かり、問題解決の可能性を共有するものとなりました。

これまで発行された「アーキテクトみえ」が、身近な建築家の活動・職能を一般の方に知ってもらうことのほかに、三重の街並み・建物、歴史ある行事、伝統工芸品などのガイドマップとして三重の観光のきっかけになることを期待しています。

30.31号以降は三重地域会のホームページにアップされていますので、ぜひご覧ください。



三重地域会HP

<https://www.jia-mie.com/>

服部 昌也 (JIA三重)

八武組



扶桑町はその名の通り江戸時代から養蚕が盛んな土地で、昭和5年には繭の生産高が県内第一位であった。町のほぼ中央に位置する川田家は、畑作農業のかたわら種を扱う商売を手がけ、その後金融業も営んだ。現在の家屋は大正6(1917)年、羽黒村(現犬山市)の町屋を移築したもので、昭和30年頃まで養蚕を行っていた。

主屋は木造2階建て、平入り入母屋造棧瓦葺き。間取りは二列六間型で、玄関(土間)東に一列三間、三方面に縁側を廻らす。2階は西一列を和室、他を板の間(蚕室)としている。垂壁や天井に設けられた換気口に、“お蚕(ぎゃーこ)さま”中心の家屋であったことが見て取れる。北面の潜り戸付き大戸や格子から、羽黒にあった当時こちらを表側としていたことが分かる。移築の際に勝手と玄関を入れ替え、間取りを大きく変更することなく農家に再生した。当時のほとんどの農家が平屋であった農村において、2階建てで軒高が高い町家の意匠を持つ主屋は、近代の農村集落における新たな指向を示した建物として評価されている。現在家屋は地区サロンやレンタルスペースなどに利用されている。



▲外観西面



▲2階板の間
荷揚げ用の開口部が床に設けられている



▲犬山市羽黒 稲置街道沿いの町屋

この地域は明治24(1891)年濃尾地震を受け、その後には再建された家屋が多い。当初の建築が明治24年頃とされる川田家主屋は、最近の調査で羽黒の造り酒屋を移築したと推定され、稲置街道※沿いに今も2~3棟残る町屋ときわめてよく似た造りをしている。

※註 名古屋城と犬山城を結ぶ脇往還。栗田で木曾街道と分岐。



【概要】

所在地：愛知県丹羽郡扶桑町南山名前ノ前49

建築年：明治24年頃、大正6年移築

構造 規模：木造2階建、入母屋造棧瓦葺き

登録番号：23-0530

登録年：平成30(2018)年

澤村 喜久夫 (JIA 愛知)

伊藤建築設計事務所



編集後記

●本号の特集では東海支部での様々な活動がアーカイブ化された。若年層を育てる「東海支部設計競技」

「東海学生卒業設計コンクール」や、際立つ作品を表彰する「東海住宅建築賞」など、この地域の設計活動の発展を担う重要な活動が、継続的に展開されていることを確認できたように思う。また若手建築家も参加しやすい条件で全国的に注目を集めた「西尾コンペ」の仔細も報告され、今後ますます開かれた実施コンペが増加することに期待したい。

その他、建築とデジタル技術の関係について現代を理解する「建築とデジタル技術前啓後」と「BIMが切り開く新たな創造性」の記事が取り上げられた。前者では対話型都市設計支援ツールについて概念が説明され、設計とシミュレーションが応答的に進められてい

く技術が紹介されている。今後の発展が設計そのものにどのような影響を与えるのか、目が離せない。(生田 京子)

●いよいよJIA建築家大会2023東海in常滑が始まります。本誌では、地元開催にあわせ、半年にわたり開催記念特集を掲載してきました。本号はその締めくくりとして、大会に参加される全国のみなさまにお配りすべく、増頁増刷して東海支部の活動を紹介しました。紙幅の都合もありましたが、支部設立30周年の2018年以降の5年間の活動をお披露目でき、嬉しく思っています。この5年の過半はコロナ禍にあり、活動の縮小が目立つのはと懸念しましたが、思った以上に活発だったことも実感できました。また、本号では「西尾コンペの結果報告」、「BIMが切り開く新たな創造性」、「コルゲートハウス『川合健二郎』報告」という、3つの不定期連載も区切りの記事を掲載することができました。個人的には「JIAマ

ガジン」の大会特集の編集も抱え、大変な半年でしたが、あとは常滑大会の成功を祈るばかりです。焦る編集者の督促にお応え頂いた執筆者、大会関係の皆さま、ありがとうございました。(恒川 和久)

ARCHITECT

第422号

発行日 2023.11.1 (毎月1回発行)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イツミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/



© Takuya Yamauchi

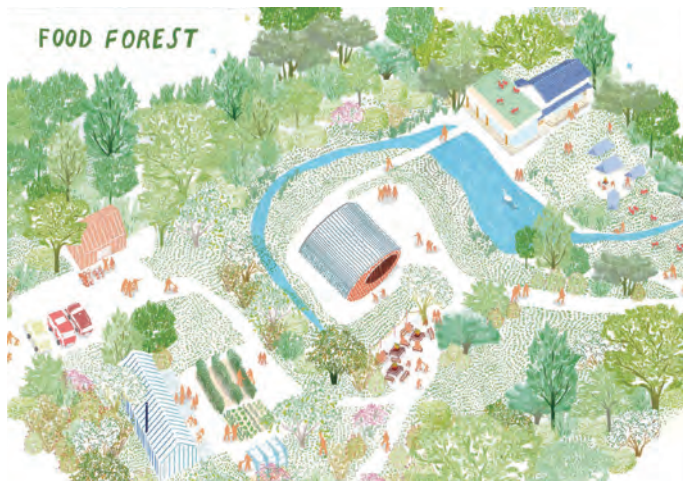
© Takuya Yamauchi

コルゲートハウスの現在

富田正行氏が解体危機にあった「コルゲートハウス」を購入後、周辺環境の整備や室内の片付けが一段落した2022年1月に撮影されたインタビューを中心とした映像アーカイブとして、YouTubeチャンネルにアップされています。

このあと「FOOD FOREST」としての整備が進み、2023年9月、宿泊など、一般の方へ公開されるようになりました。

建築家大会2023東海in常滑のエキスカッション「静岡ツアー」では、「コルゲートハウス」にも立ち寄る予定です。黒野 有一郎 (JIA愛知 地区連絡会豊橋)



YouTubeチャンネル
「コルゲートハウスの現在」
2022年1月撮影

<https://youtu.be/Eu3BrpxWZiY>

川合健二氏のご子息・健太郎氏より、建物（コルゲートハウス）を残してくれるなら好きに使ってください、から始まった「FOOD FOREST」整備工事、地球的規模のコロナ禍で大変な目にあいながらも何とか完成に近づくことができました。まだまだやりたいことが残っておりますが皆様にご覧いただける状況となりましたので報告させていただきます。

日本の小規模農業の変革を夢見て敷地内の果樹園にはもっとたくさんの果物を植えていきたいし、日本ミツバチの養蜂箱の設置、ピ

オトープの貯水・給水管理、温室の活用、地元近辺の方達との共同ワークショップなども行ってきたい。

東下の農作業所ゲストハウスは当初S造草屋根上で山羊さんを飼ってみたかったのですがスチールショックであきらめて、友人から大正末期の古民家をいただき、作業所として移築しました。東三河地方に残る数少なくなってしまった戦前の住宅建築をリノベーションして残すきっかけとしての移築でしたが、建設物価高騰であきらめざるを得ないところもずい

ぶんありました。

コルゲートハウスは川合健二氏のコンセプト大切に残しつつ外部の補強と遮熱塗料の塗布して再生させていただきました。

現地にお出かけいただき川合健二氏の考え方、コルゲートハウスのすばらしさを体感していただければ幸いです。

富田 正行 (JIA 愛知)
エム・プロダクツ

